

つわもの
兵 どもが
ゆめ
夢の跡
あと



ぶん か ひと もりしたさちこ
文を書いた人：森下幸子
え か ひと もりしたたかゆき
絵を描いた人：森下高行

いま ねん い じょうまえ はなし
今から800年以上前のお話です。

そのころ、日本では、武士(= 兵)たちがいつも戦いをしていました。武士の中に三つの強いグループがありました。平泉の藤原氏、鎌倉の源氏、そして、京都の平氏です。

平氏と源氏は、どちらも日本で一番になりたいと戦っていました。



源氏には、二人の兄弟がいました。
兄は頼朝、弟は義経という名前でした。



京都で源氏は平氏に負けました。

こども よしつね
子供のときの義経

平氏は兄の頼朝を遠い島(伊豆)に送りました。



子供だった義経は平泉に逃げました。
平泉は、日本の東北にあります。
とても豊かで平和なところでした。

金山がありました。

いい馬もたくさんいました。

そして、強い武士がたくさんいました。



ひで 秀
ひら 衡



ひらいずみ とのさま ふじわらのひでひら
平泉の殿様は藤原秀衡でした。
ひでひら よしつね たいせつ そだ
秀衡は、義経を大切に育てました。

よしつね ひでひら
義経は、秀衡のおかげですばらし
い武士になりました。

よりとも よしつね おとな あに よりとも へいし か にほん いちばん とのさま
頼朝も義経も大人になりました。兄の頼朝は、平氏に勝って日本で一番の殿様になりた
いと思いました。戦うことが上手な義経は、兄を助けました。二人は平氏と戦ってどん
どん勝ちました。
そして、とうとう源氏が日本で一番になりました。

でも、よりとも しんばい
でも、頼朝は心配でした。
「よしつね つよぶし たたか じょうず おとうと にんき わたし
「義経は、強い武士だ。戦うことがとても上手だ。弟はとても人気がある。みんなは、私
より義経のほうが好きだ。どうしたらいいんだ。」
よりとも しんばい おお
頼朝の心配は、どんどん大きくなりました。
よしつね とのさま
「義経が殿様になるかもしれない。どうしたらいいんだ。」
あたま よりとも かんが
頭がいい頼朝は考えました。
よしつね ころ
「義経がいないほうがいい。そうだ、義経を殺そう。」

よしつね よりとも かんが し いちど こども とき ひらいずみ に
義経は、頼朝の考えを知りました。それで、もう一度子供の時にいた平泉に逃げまし
た。

ひでひら よしつね かえ よろこ
秀衡は義経が帰ってきたので、とても喜びました。
ちい あそ ひでひら むす こ やすひら ただひら よろこ
小さいとき、いっしょに遊んでいた秀衡の息子たち、泰衡や忠衡も喜びました。



やす ひら
泰 衡



ただ ひら
忠 衡

でも、秀衡は次の年、病気になりました。そして、死ぬ前に泰衡と忠衡に言いました。
「義経を助けなさい。義経は戦いが上手な武士だから、私が死んでも平泉を必ず守って
くれる。わかったな。」

泰衡も忠衡も約束しました。

「わかりました。義経殿（=さん）を助けます。」
その後、秀衡は死にました。そして、泰衡が平泉の新しいお殿様になりました。

そのころ、鎌倉にいる頼朝から泰衡に手紙が来ました。



「平泉に義経がいるだろう。義経を殺せ。もし、殺さなかったら、私は平泉と戦おうと
思っている。」

泰衡は困りました。お父さんと約束しましたから、義経を助けなければなりません。で
も、平泉の殿様ですから、平泉も守らなければなりません。泰衡はよく考えました。そし
て、忠衡に言いました。

「私は、義経を殺す。義経よりも平泉のほうが大切だ。平泉を守らなければならない。」

忠衡は、怒って言いました。

「私は、お父さんとの約束を守ります。義経殿は小さいときからずっと大切な友達でし
た。義経殿といっしょに戦います。」

そのあと、泰衡は、義経や弟の忠衡と戦いました。そして、二
人を殺しました。



^{やすひら}泰衡は、^{よりとも}頼朝に^{てがみ}手紙を送りました。
^{よしつね}「義経はもう死にました。ですから、^{ひらいずみ}平泉と^{たたか}戦うことをやめてください。」
 でも、^{よりとも}頼朝は^{かんが}ずっと考えていました。
^{ひらいずみ}「平泉は^{ゆた}豊かなところだ。^{きんざん}金山も^{うま}馬も^{つよ}強い^{ぶし}武士もいる。^{ひらいずみ}平泉が欲しい。」



そして、^{あたま}頭がいい^{よりとも}頼朝は^{やすひら}泰衡に^{へんじ}返事を書きました。
 「^{やすひらの}泰衡殿は、^{おや}親との^{やくそく}約束を守らなかった。^{やくそく}約束を守らない人は^{ひと}信じることができない。あ
 なたは私の弟を殺した。^{よしつね}義経は^{にんき}人気があったから、^{あに}兄が^{やすひらの}泰衡殿と^{たたか}戦っても他の人は^{ほか}正しい
 と思うだろう。私は^{わたし}平泉と^{たたか}戦うつもりだ。」

^{よりとも}頼朝はたくさんの^{ぶし}武士を^{ひらいずみ}平泉に送りました。^{たたか}戦うことが^{じょうず}上手だった^{よしつね}義経や^{つよ}強かった^{ただひら}忠衡
 はもういません。^{やすひら}泰衡は^{よりとも}頼朝に負けました。そして、^{ひらいずみ}平泉に火をつけて逃げました。最後
 は、^{けらい}家来に^{ころ}殺されました。



よしつね ただひら やすひら おお ぶ し
 義経も忠衡も泰衡も多くの武士たちも、みんな死にました。
 すばらしい建物の、みんな焼けてなくなりました。
 あんなに豊かだった平泉の国はもうありません。



ねん ご まつ お ば しょう ひと ひらいずみ け し き み はいく ご しち
 それから、500年後、松尾芭蕉という人が、この平泉の景色を見て、俳句（→五・七・
 五のリズムでつくった17文字の短い詩）をつくりました。

なつくさ つわもの ゆめ あと
 「夏草や 兵 どもが 夢の跡」

なつくさ なつ げん き そだ くさ
 夏草：夏に元気に育っている草

つわもの ぶ し
 兵 ども：武士たち

あと のこ
 跡：残っている しるしや もの

